単元の言語活動３
月が詠まれた和歌を鑑賞する

活動のねらい

古来から古典には月に関する表現が多く見られ、また月を詠んだ歌も多い。それだけ日本人は月と密接なかかわりがあったと考えられる。

この活動では、古典文学と月の関係について理解し、その上で月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表し主体的な学びを深めていくことがねらいである。具体的には、月の様々な呼び名を調べたり月が詠まれた和歌を鑑賞したりすることにより、日本人の月に対する繊細な感性を知るとともに、月と人々の生活がより密接であったことにも気づかせたい。また月が詠まれた和歌を鑑賞することで、古の人が月を見て何を感じていたかやどのように歌に詠んできたかを捉えさせたい。それらの学習を調べ学習やグループでの話し合いを通じて行うことで、主体的に学び、相互に学びを深めていきたい。

タイトル・序文の解説

日本では明治期に至るまで長い間太陰暦を使用しており、月と人々の生活は密接に関係があった。満月のみならず様々な月の形、あり様を鑑賞する文化が日本にあったことが月の呼称や和歌の多さからうかがえる。まず、古典文学と月の関係について理解し、その上で月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月を鑑賞の対象とするだけでなく、月にさまざまな心情を託してきたことを調べ学習や話し合い、発表での共有を通して理解することを期待した活動である。

「課題」の解説

課題　**月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞してみよう。**

月の呼び名を調べるとともに、月が詠まれた百人一首の歌を鑑賞していく。

「活動」の解説

1　**月の呼び名を調べてみよう。**

①「陰暦月齢表」（三五八ページ）を見て、日付ごとに月の呼び名がどのように変わるか、確認する。

基本的には、三五八ページを見て、簡単に確認すればよいが、次にあげるものは、教科書三五八ページに掲載されている以外のものも含んでいる。

知技(2)イ

日付	月の呼び名
30日（1日）頃	新月、朔
2日頃	二日月
3日頃	三日月
7日頃	七日月、上弦の月
10日頃	十日余りの月、十日夜
13日頃	十三夜月、小望月
15日頃	満月、望月
16日頃	十六夜月
17日頃	立待月
18日頃	居待月
19日頃	寝待月、臥待月
20日頃	更待月、亥中の月
23日頃	二十三夜月、下弦

②「立待月」「居待月」「臥待月」の呼び名の意味を調べる。

それぞれ辞書等で調べ、ワークシートに記入し、発表を通じて共有する。

「立待月（たちまちづき）」…陰暦17日の夜の月で、「立ちながら待つうちに出てくる月」の意。およそ19時頃出てくるため、「立ったまま待つ間にほどなく出てくる月」というところからついた呼び名。主として8月の月について言う。「立待（たちまち）の月」とも。

「居待月（いまちづき）」…陰暦18日の夜の月で、この夜の月の出は20時頃で遅く、座してその出を待ったところから出た名前。萬葉集では「座待（いまち）月」という表記で出てくる。特に仲秋の名月に続く18日の月のことを言う。「居待ちの月」とも。

「臥待月（ふしまちづき）」…陰暦19日の夜の月。この夜の月のでは21時頃で、「出るのが遅いから伏し（寝て）て待つ月」の意。寝待月（ねまちづき）とも言う。

③「有明の月」とは、どのような月を言うのか、調べる。

辞書等で調べ、ワークシートに記入し発表し共有する。

有明の月（ありあけのつき）

陰暦16日以降の、夜明けに空に残る月のことを言う。夜更けに昇ってきて、夜明けまで西の空に残っている月。和歌によく詠まれる。参考までに百人一首で「有明の月」が詠ま

れた歌をあげておく。

・いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな　（一一番　素性法師）

・有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

・朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　（三十一番　坂上是則）

秋の夜長に恋人を待つ象徴として詠まれたり、共寝した男女が分かれる暁の時の月として詠まれたりと恋の場面で詠まれることが多いが、三十一番の歌のように純粋な叙景で詠まれる例もある。

▼評価のポイント▲　古典の世界に親しむために、月の呼び名を知るとともに、それらの呼び名がどのような背景から出てきたのか理解しているか、発表や言語活動ＷＳを確認し、分析する。

2　**次の『百人一首』の和歌ア～ウについて、①～③の手順で鑑賞してみよう。**

ア　月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど　（二十三番　大江千里）

イ　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

ウ　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　（三十六番　清原深養父）

①　六つのグループを作る。グループＡ・Ｂのメンバーはア、グループＣ・Ｄのメンバーはイ、グループＥ・Ｆのメンバーはウを「持ち歌」とする。グループ内で「持ち歌」について、「現代語訳」「月がどのようなものとして詠まれているか」を話し合い、文章でまとめる。

クラスの人数にもよるが、四〇人の生徒がいた場合、たとえば席の近い人で6～7人のグループができ、そこでA～Fを割り振る。Ａ・Ｂにはア、Ｃ・Ｄにはイ、Ｅ・Ｆにはウの歌を持ち歌（担当する歌）として割り振る。グループ内で歌の解釈について調べた上で、月がどのようなものとして詠まれているか話し合い、ワークシートに記入する。

②　グループを解体し、「持ち歌」ア・イ・ウのメンバーを必ず含む新しいグループを作る。新しいグループ内で、①でまとめた各自の「持ち歌」についての文章を発表する。

新しいグループは、いくつできてもよい。ア・イ・ウそれぞれ1人ずつで3人が最小の人数とする。グループ内で発表する。

③　ア～ウを比べた感想を新しいグループごとに発表する。

三首を比べた感想をワークシートに記入し、クラス全体に

共有できるよう発表する。

▼評価のポイント▲　進んで調べ学習やグループでの話し合い、発表を行い、古典文学と月との関係について理解し、月が詠まれた歌に対する理解を深めているか、行動を観察し、言語活動ＷＳの記入を確認し分析する。　主態

3　**『百人一首』の中から、ア～ウ以外で月が詠まれた和歌を一首選び、「月がどのようなものとして詠まれているか」について考え、鑑賞してみよう。**

まず便覧等を活用し全体で何首あるか確認する。全部で十首あるはずである。それぞれの歌について、分担などして歌の意味と月がどのようなものとして詠まれているか考えていく。月がどのようなものとして詠まれているか統一したものとして出すことは難しいが、生徒の自由な発想も生かしながら、まとめていく。　思判表Ｂ⑴オ

具体的には、以下の歌がある。

①七番　阿倍仲麻呂
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
（大空をはるか遠くまで眺めると月が輝いているが、あれは昔、奈良の三笠山に出ていた月と同じ月なのだなあ）
月は離れていても同じ月を見ていると連想させ、離れたところにいる人やものをつなぐものとしての役割がある。

②二十一番　素性法師
いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな
（すぐに行こうとあなたが言ったばかりに、九月の秋の長い夜を、有明の月が出るまで待ってしまったことですよ。）

③二十三番　大江千里
月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど
（月を見るといろいろと悲しさが感じられることだ。私一人を悲しませるために秋が来るのではないけれども）
月は物思いをさせるものとして詠まれている。

④三十六番　清原深養父
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらん
（夏の夜は短く、まだ宵だと思っているうちにもう明けてしまったが、それではいったい雲のどの辺りに宿っているのだろう。）
古今和歌集の夏一六六詞書に、「月のおもしろかりける夜あか月がたに詠める」とある。叙景的な歌で、美しい月が夜明けが来て光が薄れるのを惜しんでいる。

⑤五十七番　紫式部
めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな
（久しぶりに出会ったが、あなたかどうか見分けもつかぬ間に

帰ってしまった。たちまち雲に隠れてしまった夜中の月のように）

『新古今和歌集』雑一四九七詞書には、子供の頃の友人と久しぶりに出会ったが、月が沈むのと先を争うように帰っていたので詠んだ月がすぐ雲に隠れたので詠んだ、とあり、美しい月が隠れてしまったのを惜しんでいて、友人がすぐ帰ってしまい残念だった気持ちを重ねている。

⑥五十九番　赤染衛門

やすらはで寝なましものをさ夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

（もしあなたとのお約束がなかったなら、ためらわずに寝てしまったでしょうに、おいでをお待ちしているうちに夜が更けて、西の空に沈みかかる月まで見たことでしたよ）

『後拾遺和歌集』恋六八〇の詞書によれば、藤原道隆がある女性に約束しておきながら訪ねなかったので、翌朝作者がその女性に代わって詠んだ歌とされている。秋の夜の長い時間の経過を月によって表し、男の訪れを待つ女性のせつない思いが詠まれている。

⑦六十八番　三条院

心にもあらで憂き世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

（本心からではなく、このつらい世に生きながらえていたなら、今夜見るこの夜半の月が唯一の友として恋しく思われることだろうなあ）

作者は第六十七代の天皇であるが、病気で眼も悪く、在位中の五年間二度にわたって内裏が炎上するなど不運に見舞われた。藤原道長が退位させようとして圧迫を加えたこともあり、作者の暗い心境が月を唯一の友とみなす歌となって表れている。作者の孤独な状況が投影されている。

⑧七十九番　左京大夫彰輔

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ

（秋風に吹かれてたなびき、横に細く流れている雲の切れ間から漏れ出てくる月の光の、何とまあ、明るく澄み切っていることだろう。）

瞬間的な美を捉え格調高く詠みあげられた上で、月は清く澄んだものとして詠まれている。

⑨八十一番　後徳大寺左大臣

ほととぎす鳴きつるかたを眺むればただ有明の月ぞ残れる

（ほととぎすの鳴いた方角を眺めると、もう姿はなく、ただ有明の月が残っている）

ほととぎすの声のした方角ではもう姿が消えていたという驚きと、明けの第一声の新鮮な感動とを聴覚から視覚に移る動作を通して詠んだ歌で、月は夜明けにも残っている有明の月で、ほととぎすとの対照性が美しい。

⑩八十六番　西行法師

嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな

（月が私に嘆けといってもの思いをさせるのか、いやそういうわけではない。月にかこつけるようにして、私の涙は流れるものだなあ）

恋の歌で、月は作者に物思いをさせるものとなっており、自分の心を投影するものであったと考えられる。

以上の歌から、

・遠く離れたところでも同じ月を見ているという想像をさせ、故郷や恋しい人を思う時に詠まれる。（「天の原」）
・恋人を長い間待つ象徴や明け方に恋人と別れる場面でとして詠まれる。（「いま来むと」「やすらはで」「嘆けとて」）
・もの思いをさせるものとして詠まれる。（「月見れば」「嘆けとて」）
・美しい月が隠れるのを惜しむ場面で詠まれる。（「夏の夜は」「めぐり逢ひて」）
・月のそのものの美しさを詠む。（「秋風に」「ほととぎす」）
・月を友とみなして詠まれる。（「心にも」）

▼評価のポイント▲　古典文学と月の関係について理解し、今までの学習を生かして月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ理解を深めているか、行動を観察し言語活動WSの記述を確認し、分析する。

参考文献

「精選版　日本国語大辞典」小学館　平成一八（二〇〇六）年
「ベネッセ全訳古語辞典」ベネッセコーポレーション　平成八（一九九六）年
「全文全訳古語辞典」北原保雄　小学館　平成一六（二〇〇四）年
「月の名前」高橋順子　株式会社デコ　平成二四（二〇一二）年
「浜島書店　最新国語便覧」浜島書店　平成一五（二〇〇九）年

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア
言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔知識・技能〕⑵イ
古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑴イ
「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑴エ
「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑴オ
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。
〔主体的に学習に取り組む態度〕
進んで『竹取物語』に描かれた人物の心情などを読み取り、古典文学と月の関係について理解し、今までの学習を生かして、月が

詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表しようとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑵オ

（植田　敦子）

言語活動ワークシート　記入例

◆教科　言語文化　古文編　単元の言語活動３

◆月が詠まれた和歌を鑑賞する

課題　月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞してみよう。

1 月の呼び名を調べてみよう。

①「陰暦月齢表」（三五八ページ）を見て、日付ごとに月の呼び名がどのように変わるか、確認する。

②「立待月」「居待月」「臥待月」の呼び名の意味を調べる。

立待月	陰暦17日の夜の月で、「立ちながら待つうちに出てくる月」の意。およそ19時頃出てくるため、「立ったまま待つ間にほどなく出てくる月」というところからついた呼び名。
居待月	陰暦18日の夜の月で、この夜の月の出は20時頃で遅く、座してその出を待ったところから出た名前。
臥待月	陰暦19日の夜の月。この夜の月のでは21時頃で、「出るのが遅いから伏し（寝て）て待つ月」の意。

③「有明の月」とは、どのような月を言うのか、調べる。

有明の月	陰暦16日以降の、夜明けに空に残る月のことを言う。夜更けに昇ってきて、夜明けまで西の空に残っている月。

2 次の『百人一首』の和歌ア～ウについて、①～③の手順で鑑賞してみよう。

ア　月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど　（二十三番　大江千里）

イ　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

ウ　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　（三十六番　清原深養父）

①六つのグループを作る。グループA・Bのメンバーはア、グループC・Dのメンバーはイ、グループE・Fのメンバーはウを「持ち歌」とする。グループ内で「持ち歌」について、「現代語訳」「月がどのようなものとして詠まれているか」を話し合い、文章でまとめる。

②グループを解体し、「持ち歌」ア・イ・ウのメンバーを必ず含む新しいグループを作る。新しいグループ内で、①でまとめた各自の「持ち歌」についての文章を発表する。

③ア～ウを比べた感想を新しいグループごとに発表する。

◆ア「月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど」の歌

現代語訳	月を見るといろいろと悲しさが感じられることだ。私一人を悲しませるために秋が来るのではないけれども。
月はどのようなものとして詠まれているか	月は物思いをさせるものとして詠まれている。

◆イ「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」の歌

現代語訳	夜が明けてもそっけなく空に残る有明の月のように、あなたが無情で冷淡に見えたあの暁の別れ以来、明け方ほどつらいものはない。
月はどのようなものとして詠まれているか	女のつれない態度を有明の月に託している。

◆ウ「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ」の歌

現代語訳	夏の夜は短く、まだ宵だと思っているうちにもう明けてしまったが、それではいったい雲のどの辺りに宿っているのだろう。）
月はどのようなものとして詠まれているか	美しい月が夜明けが来て光が薄れるのを惜しんでいる。

3 『百人一首』の中から、ア～ウ以外で月が詠まれた和歌を一首選び、「月がどのようなものとして詠まれているか」について考え、鑑賞してみよう。

◆『百人一首』で月を詠んだ和歌

選んだ和歌と作者	現代語訳	月はどのようなものとして詠まれているか

【発展】
他の人があげた『百人一首』で月を詠んだ和歌では、月はどのようなものとして詠まれているか、わかったことをまとめよう。

例

・遠く離れたところでも同じ月を見ているという想像をさせ、故郷や恋しい人を思う時に詠まれる。（「天の原」）
・恋人を長い間待つ象徴や明け方に恋人と別れる場面でとして詠まれる。（「いま来むと」「やすらはで」「嘆けとて」）
・もの思いをさせるものとして詠まれる。（「月見れば」「嘆けとて」）
・美しい月が隠れるのを惜しむ場面で詠まれる。（「夏の夜は」「めぐり逢ひて」）
・月のそのものの美しさを詠む。（「秋風に」「ほととぎす」）
・月を友とみなして詠まれる。（「心にも」）
・白雪を月に見立てる。（「朝ぼらけ」）